オープニングメッセージ

俳優・エッセイスト

# 本上まなみ

ほんじょう・まなみ●1975年、東京生まれ。長女の小学校入学を機に京都に移住。出演作に映画『紙屋悦子の青春』『そらのレストラン』、エッセイに『ほんじょの虫干。』（学研プラス／新潮文庫）、『落としぶたと鍋つかみ』（朝日新聞出版）、『芽つきのどんぐり〈ん〉もあるしりとりエッセイ』（小学館）、『はじめての麦わら帽子』（新潮社）、『一泊なのにこの荷物！』（澤田康彦との共著、ミシマ社）など。

## 親の言葉よりも子どもの視野を広げるもの

ずいぶん大きくなったなあと、二人の子どもたちの背中を見て感じます。我が家はこの春から、長女が大学2年生、長男が中学2年生。働きながらの育児でしたから、見逃してしまった成長の瞬間もあったかもしれない――なんて心残りがないわけではありませんが、その分、親以外の多様な大人たちと接する機会があったのは、子どもたちにとってありがたいことでした。

高校に上がるころ、娘がこれまでにない悩みや迷いの表情を見せることがありました。中高一貫校に通っていたものの「このままエスカレーター式に進学していいのだろうか」と迷い始めたのです。「自分のやりたいことは、この環境にいて見つかるのだろうか」と悩む娘。何かアドバイスをしてあげたい気持ちをぐっとこらえて「成長とともに自分の考えが出てくるのは当然のこと。もし違う高校に進み

取材・文／塚田智恵美
写真／白井裕介
©宝島社
「大人のおしゃれ手帖」

# 大きくなった子どもと変わる親の役割

たいのなら、私たちは応援する」と伝えました。最終的に娘は、そのまま進学することを選択しました。自分のいる環境への捉え方が変わり、今すぐやりたいことが見つからなくても、高校の3年間を「本当にやりたいことを探す準備期間」に充ててよいのだと思えたようです。

成長とともに、子ども自身が自分の道を選び取らなければならない瞬間が訪れます。大学受験もそうです。娘の場合、進学先を決めるにあたり、就職や将来の可能性と「自分が学びたいこと」の間でかなり迷ったようですが、最終的に学びたいことを選びました。今は苦手な分野の勉強から解放され、やりたいことに没頭して、非常に充実している様子です。

思えば私にも「自分は一体何をやりたいのだろう」と悩んだ時期があります。子どもに自分と似ているところを見つけると、思わず口や手を出したくなってしまうもの。やけに小さくまとまりそうな子どもの姿を見ては「もっと視野を広げてごらん」なんて伝えたくなってしまうけれど、それはもしかしたら、もう親から教えるようなことではないのかもしれません。

例えば、我が家にはよく私や夫の友人たちが訪れます。さまざまな職業の彼ら彼女らに「好きなことを仕事にしてきた？」と聞いてみると、自分の「好き」が職業に直結した人もいれば、「好き」は仕事にせずに大切なものとして置いておきたかったという人もいる。本当に多種多様なんです。きっと、そんな大人たちの率直な会話を聞き、誰かの言葉が娘の心に届く瞬間があって、娘も自分のこれからを考えていったのでしょうね。

## 自分を耕し、出た芽をじっくり育てる3年間に

子どもが大きくなったのと同じだけ、親も歳を重ねています。印象的な言葉がありました。娘の高校でPTA役員をしたとき、薬膳講座を企画したところ、いらした講師の方がこうおっしゃったのです。「子どもも思春期で心身の不調を抱えやすいですが、親も中年期に入り、不調が現れる年代です。これまでは子どものために全力を尽くしてきたかもしれませんが、これからは自分のことも大事にしましょう」と。

この言葉には、深く共感しました。親もまた、心身ともに変化の時期なのです。子が変わり、親が変わり、そして親子関係も変わっていく。「親が前を歩き、子の手を引く」関係から、「横並び」、そして「少し後ろから親が見守る」といったように。だから親自身が自分を労り、趣味や楽しみを見つけていくことも大切なのかなと思います。

昨今は目まぐるしく社会環境が変わっており、この学部に進めば大丈夫、この仕事に就けば安泰、と信じられるようなものは、もうないのかもしれません。変化の渦中に飛び込んでいく子どもたちはきっと「どうしたい？」と何度も自分に問い、揺れ動くことになるのでしょう。

だから高校の3年間くらいは、子ども自身が自分の内側を耕し、肥料をやり、水をやりながら、たまたま芽吹いた自分の「好き」や「やってみたい」という気持ちを、ゆっくり育てていってもいいのではないでしょうか。ささやかな芽かもしれない。将来には必ずしもつながらないかもしれない。それでも、わが子の中に小さな芽がひょっこりと出てきたときに「ゆっくり、じっくり育てていいよ。その芽はきっと、あなたの人生を豊かに彩ってくれるものだから」と伝えてあげたいですね。

『みんな大きくなったよ』
著 本上まなみ／ミシマ社

いち生活者・表現者として、家族や仲間とともに重ねた本上まなみさんの日々が詰まった一冊。ふるさと庄内、賑やかな家族、東京での仕事、子どもと暮らす京都…本上さんの日常が、ユーモアたっぷりに綴られています。